

ツビの時代はどうであったのかを、義父で牧師の芦名直道(一九五〇―一九五二 ユニオン神学校留学)のユニオン神学校の写真付き名簿で確認したところ、ユニオン神学校の同級生には黒人が数人在籍していた。テイリツヒが黒人の学生達と交流があったことは事実である。

一方、一九三〇年から九ヶ月間、「アメリカの教会・神学事情を研究する」ためにユニオン神学校に留学したデイトリツヒ・ボンヘッファー(一九〇六―一九四五)は特筆すべきである。彼は、ハーレムのアフリカン・メソジスト・エピスコパル教会の共同体から影響を受け、ハーレム最古の教会でゴスペルで有名なアビシニアン・バプテイスト教会に、ユニオン神学校の黒人の友人の案内で、約六ヶ月間、ほとんど毎日曜日の午後三時半に教会に通い、教会学校にも奉仕した。日曜学校と教会クラブの正規の協力者になった。彼が黒人教会への奉仕に心底から喜びを見出し、「アメリカの滞在の間、私はできるだけ時間を費やして、黒人問題をあらゆる面から知ることと、この隠された角度から白人のアメリカを観察することに努めた」と言い、ゴスペルもお得意の歌となった。ワシントンの黒人総合大学ハワード・カレッジにも行く。このハーレムでの経験が、福音の社会的側面に対する彼の眼を開かせ、神学者から同時代人として生きる契機となったと言われている。

ボンヘッファーは「このような黒人たちとの個人的な接触は、私のアメリカ滞在の間で最も決定的で喜びに満ちた出来事の一つであった。私はここでごく簡単に黒人教会の特性について語ることができるが、何よりも先ず、私は黒人教会におい

て、福音が語られるのを聞くことができたのである。そこで本当に福音について語られる時、それにあずかるうとする空気は最高潮に達する。そこでは、罪と恵み、神への愛と終わりの望みとが、われわれが今までに馴れていたとは違った形ではあるけれども、本当にキリスト教的に語られ、きかれることができた」と言う。

テイリツヒとボンヘッファーをつなぐ人物はラインホルト・ニーバーで、時期は違うが、二人をユニオン神学校に招聘した。ハーレムの黒人教会に積極的に参与したボンヘッファーは、一九三九年亡命のためユニオン神学校を再訪するが、すぐにドイツに帰国し、ヒットラーの暗殺に加担したため、処刑される。

マハトマ・ガンディーにおける 宗教的多元主義と世俗主義

外川 昌彦

インド独立の父マハトマ・ガンディーは、一九二〇年代初のヒラーファト運動において、宗教間の対話に期待し他宗教との相互理解と寛容性を訴えていたが、一九三〇年の塩の行進では、むしろ個別の「宗教」には依拠せず、しかし極めて宗教的な装いを伴ったナショナリズム運動を組織した。本報告では、このようなガンディーの宗教と政治をめぐる認識の変化の背景に、一九二〇年代を通して顕著となる各地での宗派暴動の

拡大があると考え、その多様な言説の変化を跡付けている。

たとえば、ガンディーの宗教的多元主義として、以下の文章が知られている。「川は数多く、その姿は様々であるが、それらはすべて海に注ぐのである。同様に、多くの宗教があるかもしれないが、その真の目的は同じである。」(Happy New Year, *Indian Opinion*, November 9, 1907)

特に、宗教と国民統合については、有名な『ヒンド・スワラージ』(一九〇九年)で次のように述べている。「人びとが異なる宗教に属しているからといって、インドがひとつの国民であることを止めることはない。…多くのヒンドゥー教徒とイスラーム教徒は、共通の祖先を持ち血管には同じ血が流れていることを、我々は思い出すべきだろう。宗教を変えたからといって、敵になるのだろうか。ムスリムの神は、ヒンドゥーの神と違うのだろうか。宗教は、同じ目的地向かうための様々な道なのだ。」

そのため、当初のガンディーは、次のように宗教的寛容性の重要性を強調した。「世界には、ただひとつの宗教だけがあるべきだという信念を私は認めない。だからこそ私は、諸宗教に共通する要素を見つけだし、いつも相互の寛容さを引き出そうと闘っているのだ」(*Ignorance, Young India*, July 31, 1924)

しかし、塩の行進を経た『獄中からの手紙』(一九三二年)では、その論調は、次のような変化を見せる。「寛容という語には、他人の宗教が自分のものより劣っているといたいたいわれなき思いあがりが含まれています。…ちようど一本の樹の幹はひとつですが、枝葉が無数にあるように、真の完全な宗教はひ

ひとつですが、それが人間という媒体をとおして表わされるときには多となるのです。一なる完全な宗教は、いっさいの言語を超えたものです。ところが不完全な人間が、それを自分に駆使できる言語で語り、その言葉がまた、同じ不完全な人びとによって解釈されるのです。いずれの人の解釈が正当だと主張できましようか。だれもみな、その人の見方からすれば正しいといえましようか、だれもが誤っているとさえいえないこともありません。」

最終的にはガンディーは、次のように宗教的寛容性に否定的な見解を示す。「あなたは、相互に寛容であるべきだという立場を受け入れようとしているのですか。それとも、すべての宗教は平等であるという立場を受け入れようとしているのですか。私の立場は、すべての偉大な宗教は基本的に平等である、という立場です。」(*Harjan*, November 28, 1936)

本報告では、このようなガンディーの宗教と国民統合をめぐる言説の変遷を通して、ガンディーがインドの宗教伝統をどのように捉え、それが現実政治にどのような意味をもたらすと考えていたのかを明らかにする。特にここでは、インド的伝統としての宗教的真理の多元性と寛容性への強調から、普遍的な真理の追究を通じた多様性の実現への転換が指摘される。このような認識の転換が、ガンディーにおいては、宗派暴動が頻発した一九二〇年代を通じた宗教を捉えなおす内省的な視点を通して導かれることが論じられる。